

第 64 回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(生理学・医学関連分野)

所属機関・部局・職名: オックスフォード大学 ナフィールド骨関節疾患医療研究センター 博士研究員

氏名: 波多野 寛子

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

会議は「充実」の一言に尽きます。会議の雰囲気は、私たち若手研究者が、ノーベル賞受賞者に続いて大きな足跡を残すことができると思わせてくれるもので、全体を通して、何か大きな使命感を抱かなかった人はいなかったと思います。それほど、会議は私たち若手研究者を鼓舞し、自由でオープンな関係の構築を促してくれるものでした。

会議が毎年同じ所で開かれ、またリンダウという非常に美しい豊かな国境の保養地というだけあって、町全体が会期中、研究者の交流のためにあるようにさえ感じます。会議参加者全員には、プログラム等の冊子とともに同じ鞆が配られるので、町を歩いてもその人がすぐに参加者と分かります。道行く道で、初対面であればお互いに自己紹介をし、次の会場に研究内容を話しながら一緒に向かう毎日でした。

連日早朝から深夜まで、濃密なスケジュールですし、講演内容も目まぐるしく変わりますが、すべての講演についつい聞き入ってしまい、あつと言う間に時間が過ぎてしまいました。

早朝の Science Breakfast は、私が臨床に携わる身ですので、Science in Clinical Medicine と題されたものに参加しました。参加者は同様に臨床研究者が多く、論点は主に、臨床と研究の両立に自然と絞られました。

*Prof. J. Michael Bishop*, Dr. Christoph Klein そして同世代の若手研究者をパネリストに、臨床と研究、それを両立していく物理的な難しさや悩み、誰かが明確な解答を出せたのではなく、自分の姿勢とそこに至った過程をお話して下さったことは、私だけではなく、誰もが模索しているのだと知ることができ、とても心強く感じました。

Dr. Klein が力を込めておっしゃった“find your own way in your own place” “medicine is a great tutor of science”という言葉はとても印象的で、振れ幅の大きいことだけに答えはない、自分を信じなさい、と背中を押された思いでした。また、臨床研究を取り巻く予算や仕事環境・時間の難しさを、若手研究者が指摘したところ、Prof. Bishop は“small science is good science” “you have to be brave to set it up”と、目先のことに捉われるのではなく、自分の信念と良心を信じて貫きなさい、と言われました。受賞者の先生方が往年悩まれた上に言って下さる言葉は、更に重く、私たちどの若手研究者の心にも響きました。

(Prof. Bishop は、明言は避けられたものの、講演の際にも Nature 誌の捏造問題に再三触れられ、本質を見失ってしまう現在の研究環境を吐露されました。それは非常に悲しくもあり、けれども私たちが普段感じていることは、やはり誰もが難しさを感じ疑問視しているのだと認識でき、安堵するものがありました。研究を続けていくこと、まして臨床と研究を両立していくこと、予算面にとどまらない社会システム上の困難さにも理解を示し、ともすれば自分の努力が足りず自分だけが悩んでいるのかと孤立しがちな若手研究者の私たちにとって、心理的なサポートになったことは言うまでもありません。)

*Prof. Ada E. Yonath* の講演は女性研究者がとても勇気づけられるもので、講演の最後に、自分を支えてきてくれたのは家族、と写真をいくつか紹介され、“I’m not a feminist, but I want to say, Young women!! You can be a great mother not only a great scientist!!”と述べて締めくくられ、参加者の女性たちから拍手と歓声が沸き起こったことは、とても感動するものがありました。

会期中に他の研究者と話す中でも、制度的に先進的なヨーロッパにおいてでさえ、少なからず女性が仕事を続けていく難しさを感じる、というのは驚くところではありましたが、日本の難しさはこの国の研究者も知るところで、私も何度も尋ねられました。そんな中であって、*Prof. Yonath* の言葉は私たちをとても勇気づけてくれるものであり、仕事か家族かとどちらか一方しか選べないと感じている女性にとって、力を与えてくれるものでした。

*Prof. Oliver Smithies* の講演は、誰もがほっとさせられるところがあったと思います。ただただ研究が好きでたまらない、それを感じさせて下さる方で、“Do something you can enjoy”と何度も何度も繰り返していらっしゃいました。講演では、若手研究者からたくさんの質問が上がりますが、中でも特に若い学生かの質問が多く、“ノーベル賞はどうやったら取れるか”というような質問も出ました。*Prof. Smithies* は成果主義に走りがちな現代をやや悲しみをもって答えられ、“if you couldn’t get it, you would be miserable. That’s why you should do what you can enjoy.”と言われました。この受賞者会議の講演の大鳥を務められた講演でのその言葉は、他の受賞者の先生からも何度も出てきたその言葉を、その穏やか雰囲気の中で私たちに深く刻み込んで下さったように思います。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

とてもタイトな講演スケジュールの中にあっても、講演の前、そして午後の Discussion、夜のディナーパーティーと、ノーベル賞受賞者の先生と直に話をするすることができます。

International Dinner では、偶然にも *Prof. Barry J. Marshall* の隣に座らせて頂き、ひたすら興奮するばかりでした。とてもユーモアにあふれた先生は、研究のこと臨床のこと趣味のこと、スマートフォンの写真を見せては色々お話下さいました。

臨床と研究の両者を進めていく中で、物理的な難しさを感じる事が多くあります。

個人的なことですが、自分の気になる疾患のこと、所属場所での症例は数少ないが今後蓄積して続けていきたいことなど、心の奥底に抱いていても難しいかと思ってしまう、そんなこととお話したところ、いつでも写真を取っておくこと、いつも心に抱えていること、それこそ大事だよ、と言って下さり、この上なく嬉しく思いました。

*Prof. Peter Agre* の Discussion では、皆が最後にスタンディングオベーションになったほどでした。ヒューマニティーにあふれ、これまでの人生を語って下さる先生の姿に、心を動かされなかった人はいなかったと思います。

研究に行き詰ったり、やっていることがつまらなく感じたりすることはないのか、と言った質問も出て、“have plan B”と言われたことにはなるほどと思いました。研究一つ一つのことにして生き方にしても、と加えられ、今でも世界中を渡り歩いていらっしやっている先生だからこそその言葉と心に響きました。今まで理不尽に感じたことは、との質問には、“world never be perfect”と言われ、多くの悩みの上にこのような素晴らしい先生がいらっしやって、言葉があるのだと、安心感さえ抱きました。そして、大きな仕事や大きなことを成し遂げようと躍起になるのではなく、“not evolution just about natural selection”と言われ、色々なことにたとえ悩んだとしても“time helps”と言われました。

セミナーの最後にと、歌を歌って下さり、会場に拍手がやむことはなく、セミナー後も先生の周りから人が途絶えることはありませんでした。それは、それだけ、誰もが表立っては口にしないものの、私たち世代が、これからのキャリアを積んでいく中で、悩み苦しみ、それでも自分の信じることを信じるままになんとか頑張りたい、現在の私たちを取り巻く環境は確かに厳しいものではあるけれども、それでも今後の医療に貢献できたらと、真剣に悩んでいることの表れでもあるように感じました。

また別の日には、*Prof. Elizabeth H. Blackburn* と夕食を同席させて頂き、温かいまなざしに心を打たれました。“女性が働いていくのは、難しいことがやっぱりまだまだ多いと思う、だからこそ私がこうして姿を見せられたらと思っているのだ”と言われ、その温かい手でハグして下さい、とても救われる思いでした。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

Young scientists といっても比較的幅広い層の参加者がいて、undergraduate や PhD student の熱いまっすぐなまなざしには非常に圧倒されました。

けれども、私はやはり同世代のポストドクと過ごすことが多かったように思います。熱意だけではどうにもならない現状を知って行く中で、同じように悩み、同じようにもがいているということが、お互いにとってどれだけ励まされることであるか感じたことはありません。

そして何より、同世代の良さで、共同研究の可能性の模索や、研究の方向性のお互いの助言と、実質面でも非常に有意義なものとなりました。

グラントの獲得の仕方、ポジションへのアプライ、海外と自国の橋渡しの困難さ、自分たちの周りを取り巻く環境。誰もが違う国から参加しているので、誰もがそれぞれの国のシステムを知りたいと思い、それは自分たちを取り巻く環境に少なからずの困難さを感じており、けれども、自分たちが将来的に、少なからず良い方向にもっていけるのではないかと案を探しているからであったと思います。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

昼食会を催して頂き、日本人研究者間の交流の機会を頂いたことはとても嬉しく、また他の海外の方以上に親しみを感じ、また JSPS や文科省の方から温かい励ましの言葉を頂いたことは、今後の研究活動に非常に有意義なことでありました。

一方で、私はアメリカンパーティーの招待も頂きましたが、そのパーティーでは各テーブルに一人のアメリカ研究者と数人の招待者が座りました。アメリカ研究者がアメリカの環境の良さやシステムを自分たちの言葉を持って話していたことは、戦略的でありつつも非常に印象的でした。

JSPS の海外者向けのプログラムは非常に充実して有意義なものが多いのに、実際海外で研究をしていて、認知の低さを残念に思わないことはありません。

今後の JSPS の発展と日本の研究環境を世界にアピールしていくことを考えたとき、そうしたパーティーを開くことができるならば、非常に有意義なことではないだろうかと思いました。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

学位を取得し 3 年目となり、今後研究を続けていくことに不安を覚えないことはありません。生活の面、女性であること、そうしたことにリンダウは答えを導いてくれた気がします。皆が同じような悩みを抱えもがいてきたこと、元から special であったわけではなく、自分で自分を special にしていったのだ、そんな印象を受けました。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

今回の会議では、科学に限らず、各国での funding システムや仕事をしていく環境についても、ノーベル賞受賞者の先生のお話を聞くことはもちろん、他の若手研究者とディスカッションする機会を得

ることができました。心理的な面で励まされたことは言うまでもありませんが、研究環境についても、今まで以上に国更には研究室という枠がなくなっていく状況にあって、これからは担っていく私たち世代が、より良い形を模索しそれを構築していく役割があること、その可能性を感じさせてくれました。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

とても有意義な学会です。参加をとにかくお勧めします。

今回、科学的側面に留まらず、ノーベル賞受賞者を始め多くの優秀な研究者の先生方、同世代の若手研究者たちと有意義な議論を交わせたことは、とても貴重な体験でした。

ご支援下さいましたことをこの場をかりて心から感謝申し上げます。